

社会技術研究開発事業
令和6年度研究開発実施報告書

「SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム
(社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)」

「 オールマイノリティプロジェクト：発達障害者を始め
とするマイノリティが社会的孤立・孤独に陥らない
認知行動療法を用いた社会ネットワークづくり 」

大島 郁葉

千葉大学 子どものこころの発達教育研究センター 教授

目次

1. 研究開発プロジェクト名	2
2. 研究開発実施の具体的内容	2
2-1. 研究開発目標	2
2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン	3
2-3. ロジックモデル	4
2-4. 実施内容・結果	5
2-5. 会議等の活動	14
3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	15
4. 研究開発実施体制	16
5. 研究開発実施者	18
6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	21
6-1. シンポジウム等	21
6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	22
6-3. 論文発表	23
6-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	23
6-5. 新聞／TV報道・投稿、受賞等	24
6-6. 知財出願	25

1. 研究開発プロジェクト名

オールマイノリティプロジェクト：発達障害者を始めとするマイノリティが社会的孤立・孤独に陥らない認知行動療法を用いた社会ネットワークづくり

2. 研究開発実施の具体的内容

2-1. 研究開発目標

スモールスタート期間での目標

1年目：社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムについて、児童思春期以降の発達障害者および成人の定型発達者を対象とする大規模社会調査（発達障害者1,000人程度、定型発達者1,000人程度）を施行し、「発達障害者の社会的孤立・孤独の生成プロセスと維持モデル」の解明、および「（発達障害者に対する）マイクロアグレッション予測モデル」を作成する。マイクロアグレッション解消のための支援法ライブラリを作成し、先行研究の知見をもとに「マイクロアグレッション予測モデル」とのマッチングを行う。

2年目：マイクロアグレッション解消のために個人ごとに有効な支援法を取り出す仕組み「オールマイノリティアプリ」のプロトタイプとなるCBTのアルゴリズムを作り上げる。同アルゴリズムをもとにアプリの試作を完成させ、パイロット研究として、2施設（千葉大学附属病院精神科・千葉大学教育学部）にて試験実装する。この時期は、アプリ使用と併用して、定期的にCBTセラピストがアプリのチャット等を用いて有人でのサポートを行い、セラピストからのフィードバックもデータ化する。また、スモールスタート時の研究成果をもとに、映像作家および漫画家らの芸術チームと発達障害者への偏見の持たれ方や、マイクロアグレッションに関するシナリオ等を作成する。なお、春にオールマイノリティプロジェクトの広報を目的としたキックオフシンポジウムを千葉大学にてハイブリッド方式で行い、発達障害やインクルーシブ教育の専門家を招聘しシンポジウムを開く。また、啓発チームによるマイクロアグレッションやマイノリティ・マジョリティの気づきを向上させる短編動画や漫画等を公開する。

本格研究期間での目標

3年目：オールマイノリティアプリ（施策版）を複数の施設（千葉県発達障害者支援センター・相模女子大学・信州大学・(株)リタリコ、みらいのいばしょ研究所等）に

て、6か月間実装し、定期的にフォロー及び評価を行う（試験終了後、6か月から1年程度での施行予定）。この間、CBTセラピストは有人ではなく、オートメーション化する。芸術チームは、アプリでは測定できない環境型マイクロアグレッションや、発達障害者当事者からのメッセージを伝える映像作品および漫画等を作成する。

4年目：アプリの実施3年目の継続中、1年程度を経た施設に関しては、最終評価を行い、データをもとにアルゴリズムの最適化を行い、「オールマイノリティアプリ」の完成とする【PoC】。芸術チームは映像作品および漫画等を完成させる予定であるが、本プログラムで得られた知見から、自分たちのチームが作成した作品に対してもマイクロアグレッション検出ツールを適用して妥当性の検出をし、コンテンツの最適化に活用する。その後、協力施設らに配信を開始する。

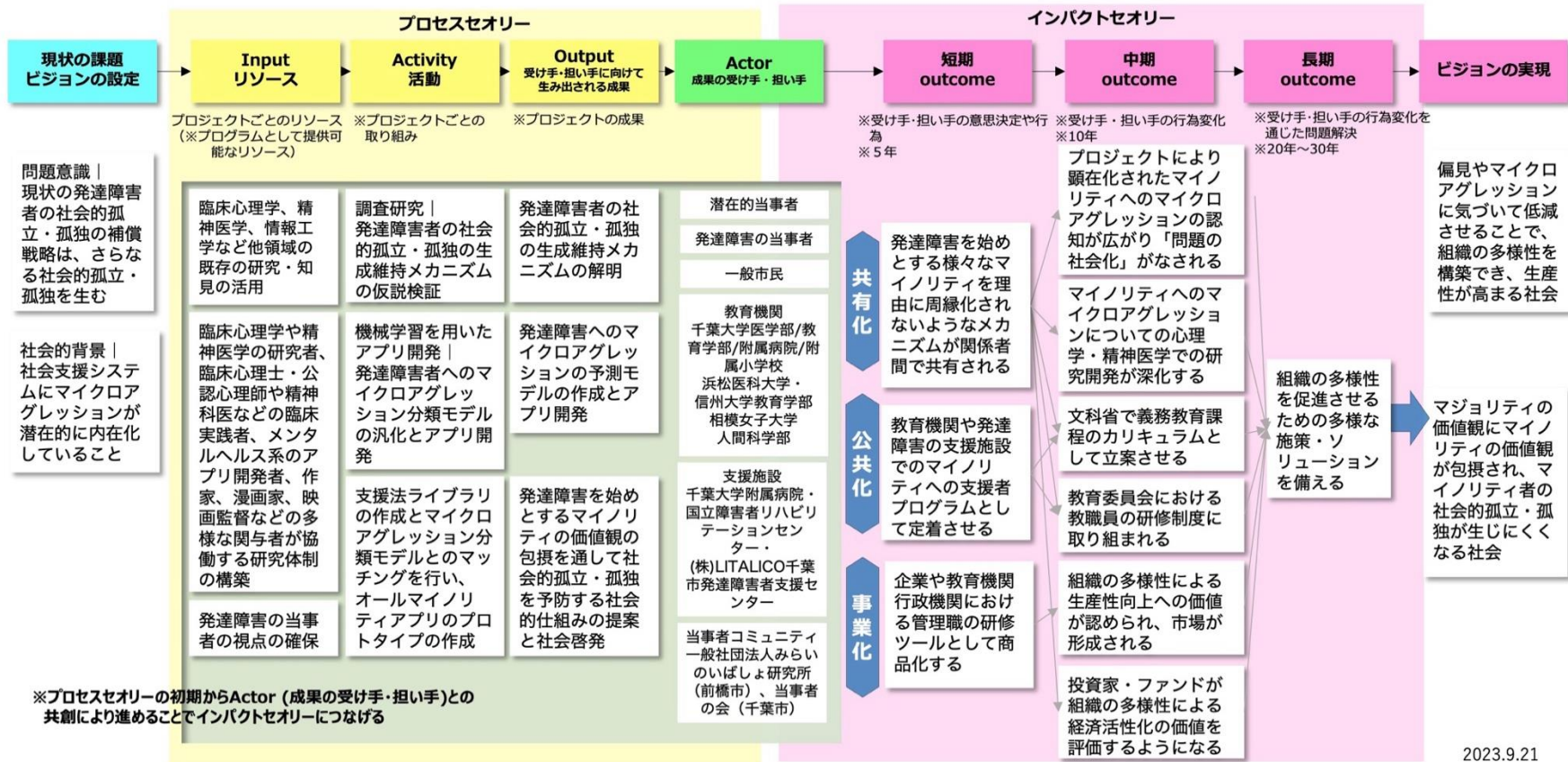
5年目：5年目の前半にすべての施設の最終データを取り終える。効果検証として、啓発（介入）の前後で、マイクロアグレッションの減少を定量的に解析する。またマイクロアグレッションの啓発作品をアプリ内の心理教育マテリアルとして使用し、その後、企業研修や教員研修用として商品化し、企業や学校等に流通させる。その後、千葉大学教育学部、千葉市教育委員会の協力を得て、教員研修（特別支援教育等、発達障害に関する研修）の一環として試験的に本アプリを使用してもらい、教員への使用においてもエビデンスを構築する。

2-2. プロジェクトのリサーチ・クエスチョン

- Q1. 本邦における発達障害者の社会的孤立・孤独の生成・維持のシステムはどのようなメカニズムがあるのか？
- Q2. 発達障害（特に自閉スペクトラム症）当事者のマイクロアグレッションの体験の実態やその特徴は何か？
- Q3. 本プロジェクトで開発する、発達障害者への支援者および家族に向けた、よりよい支援のためのマイクロアグレッションを減少させることを狙ったアプリである「オールマイノリティアプリ」の効果はあるのか？

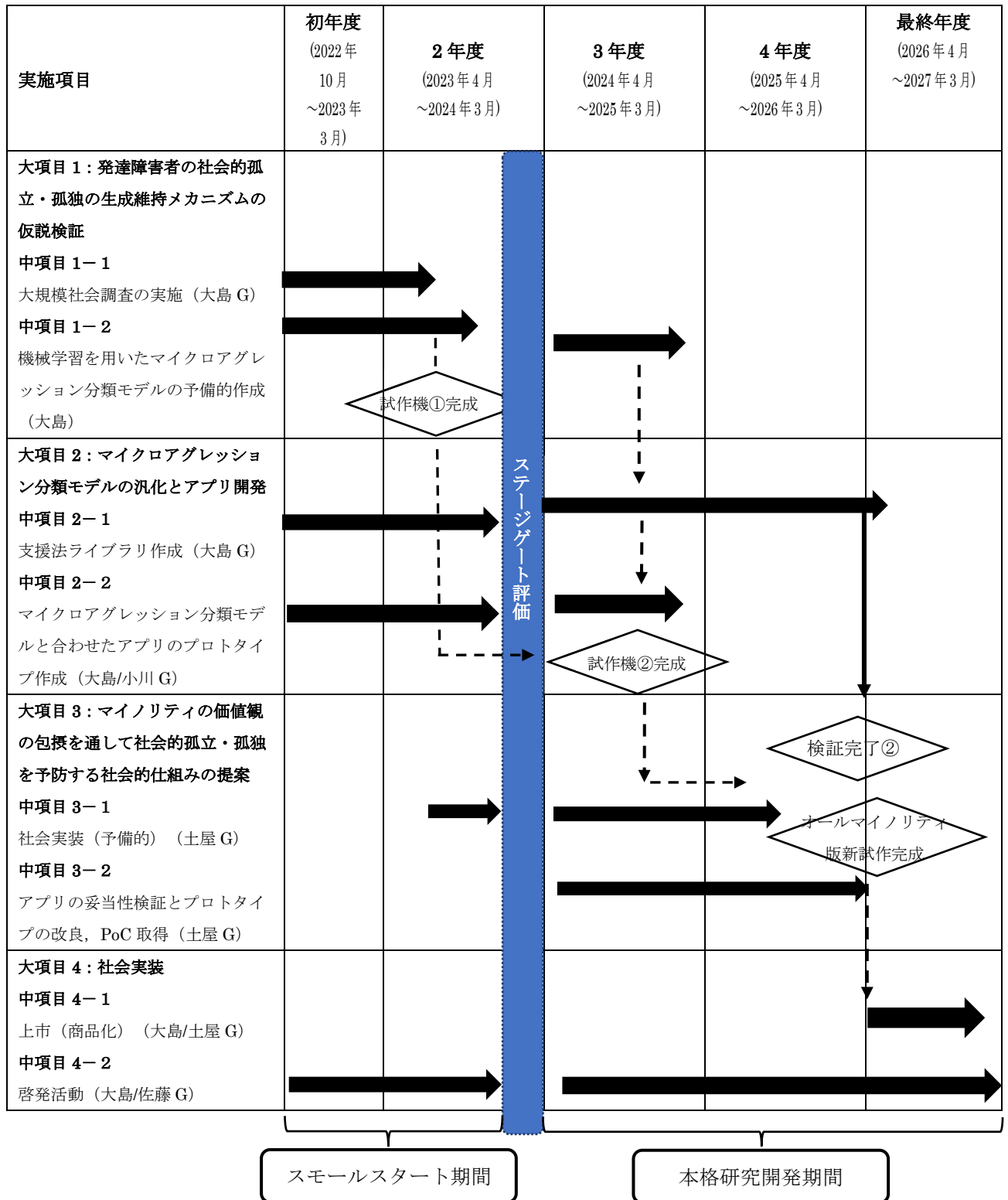
2-3. ロジックモデル

SDGsの達成に向けた共創的研究開発プログラム (社会的孤立・孤独の予防と多様な社会的ネットワークの構築)
 「オールマイノリティプロジェクト：発達障害を始めとするマイノリティが社会的孤立・孤独に陥らない認知行動療法を用いた社会ネットワークづくり」ロジックモデル



2-4. 実施内容・結果

(1) スケジュール



(2) 各実施内容

当該年度の到達点① 発達障害者の社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムの仮説検証およびメカニズムの国際比較

■中項目1-1 大規模社会調査の継続実施

期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

担当：調査研究・認知行動療法グループ

対象：Web調査において、令和5年度に調査に参加協力された発達障害者約900名の継続調査を行い取得した縦断データを用いる。また、新規に、支援者を含む一般対象（過去に精神疾患などの診断がなく発達障害に関するスクリーニング検査で閾値以下の18歳以上39歳以下の男女）1000人程度を対象にした調査を実施する。

実施内容：

発達障害者：初年度に取得したデータを用いて検討した、発達障害者の社会的孤立・孤独に至るプロセスの論文化を進めた。調査で集めたデータを機械学習グループに提供し、マイクロアグレッション分類モデルの作成のために提供する。

定型発達者：定型発達者を対象に背景情報のほか、価値観に関する調査（自由記述）、マイクロアグレッション尺度、発達障害へのマイクロアグレッションをしたかもしれない体験（自由記述）、孤独感に関する尺度などを実施した。

発達障害者と定型発達者のデータをマージし、価値観・偏見・孤独感などについて群間差の検討を行なった。

■中項目1-2 発達障害者に対するマイクロアグレッションの国際比較データの論文化

期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

担当：調査研究・認知行動療法グループ

実施内容：2023年度に施行したストックホルム大学との共同研究における発達障害者へのマイクロアグレッションのデータと、同じく2023年度に施行した国内調査における発達障害者へのマイクロアグレッションのデータの国際比較を行なった。

当該年度の到達点②（発達障害者に対する）マイクロアグレッション分類モデルの作成

期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

担当：アプリ開発・機械学習グループ

対象：2022-2023年度の大規模調査で得られたテキストに対してアノテーションを付与したデータを用いる。

解析：2023年度末までに、(1)BERT (Bidirectional Encoder Representations from Transformers)を用いたマイクロアグレッションかそうでないか判定する学習済みモデルと(2)相関トピックモデルを用いたマイクロアグレッションを含むテキストの種類を分類する学習済みモデルが作成することができた。2024年度は、その学習済みモデルに基づいた新規入力テキストの分類をオールマイノリティアプリ上で行った。現時点で学習自体は完了しているが、調査研究・認知行動療法グループと連携し、適宜アプリ上での表示の調整などを行う。また、アプリの検証・実装プロセスを通して、新規のテキストが一定以上取得された場合には上記モデルの再学習を行う。再学習に関しては、ある程度再学習が自動化できるように開発を進める。2024年度にパイロット試験が終わり、精度を向上させるためにサンプルサイズを追加して精緻化の調整を続けている。

当該年度の到達点③ オールマイノリティアプリのプロトタイプの実成

■中項目4-1 アプリにおけるプログラム作成

期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

担当：調査研究・認知行動療法グループ、啓発グループ

実施内容：発達障害者の社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムの検証など、これまでの本プロジェクトにおける調査研究の成果に基づき、認知行動的技法を用いてマイクロアグレッションを低減させるプログラムの開発を行った。

■中項目 4-2 啓発活動

期間：令和6年4月1日～令和7年3月31日

担当：啓発グループ

実施内容：2024年度も前年度に引き続き当事者の体験談に基づいた漫画作成を行い、定期的にSNS等で拡散を行い、マイクロアグレッションやマイノリティに関して啓発を続けた。2025年度は、マイクロアグレッションのデータ解析を用いたエビデンスベースドな動画や漫画10本程度を啓発グループで作成し、定期的にSNS等で拡散を行なう。また、漫画に関しては、出版社と話し合い出版化を目指す。作成したコンテンツに関しては、マイクロアグレッション検出ツールを適用して妥当性の検出をし、コンテンツの最適化に活用する。

(3) 成果

当該年度の到達点①発達障害者の社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムの仮説検証およびメカニズムの国際比較

■中項目 1-1 大規模社会調査の継続実施

現在はスウェーデンのデータを取得中である。

■中項目 1-2 発達障害者に対するマイクロアグレッションの国際比較データの論文化

現在、2本の論文を投稿中である。

当該年度の到達点②（発達障害者に対する）マイクロアグレッション分類モデルの作成

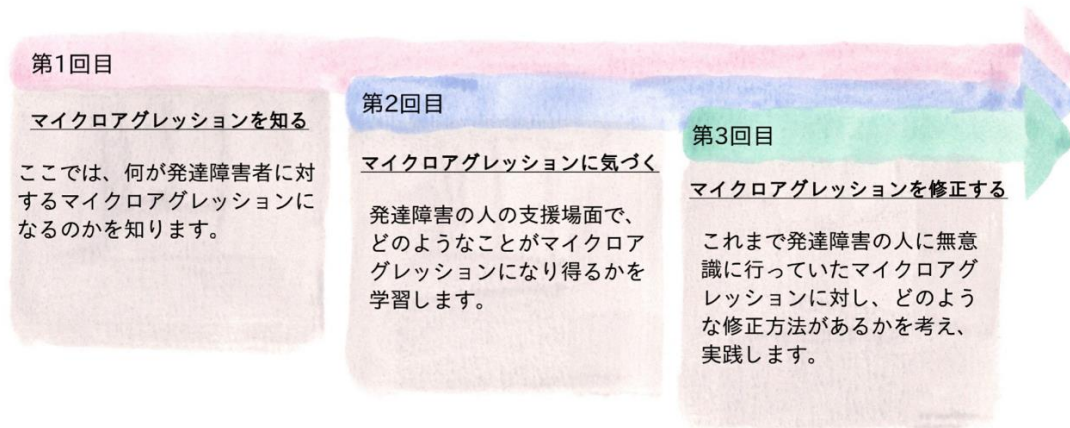
■中項目 2-2 機械学習を用いたマイクロアグレッション分類モデルの予備的作成

当該年度でパイロット試験が完了した。現在は、さらに精度を向上させるためにサンプルサイズを追加して精緻化するための調整を続けている。

当該の到達点③オールマイノリティアプリのプロトタイプ作成

■中項目 2-1 アプリにおけるプログラム作成

「オールマイノリティアプリ」の試作版となる“発達障害の支援者が、マイクロアグレッションを知り、気づき、行動を変えることを目指した「マイクロアグレッションに気づいて変えるプログラム」”が完成した。これにより、プログラムの受講者がこれまでの経験や知識を活用しながら、より効果的な支援ができるようになることが期待される。



当該年度の到達点④社会実装：「オールマイノリティアプリ」の妥当性検証とプロトタイプ の改良、PoC取得

■中項目 4-1 上市（商品化）

令和6年度にオールマイノリティアプリの試作版が完成した。現在はプロトタイプを用い、複数の施設（株式会社 LITALICO、一般社団法人みらいのいばしょ研究所等）に所属する発達障害者の支援者に対し、有人でのプログラムを実践し、妥当性の検証を行った。

■中項目 4-2 啓発活動

前年度に引き続き当事者の体験談に基づいた漫画作成を行った。定期的に SNS 等で拡散を行うことで、マイクロアグレッションやマイノリティに関して啓発を続けた。活動内容は、ホームページ等で公開している。（<https://all-minorities.com/>）



(4) プロジェクトのリサーチ・クエスチョンについて明らかになったこと

Q1. 本邦における発達障害者の社会的孤立・孤独の生成・維持システムはどのようなようになっているのか？

A. 本邦における発達障害者の社会的孤立・孤独の生成・維持システムとしては、発達障害者が受ける社会からのマイクロアグレッションがあると、他者からの受容を受けるとに負の影響があり、その他者からの受容がない結果、社会的孤立・孤独が増すことになり、同化が促進されるという関係が明らかになった。今回の分析結果の一部は、我々の本調査の仮説である「マイクロアグレッションが、発達障害者の社会的被受容感を阻害し、社会的孤立・孤独に影響を与え、その結果、非定型の発達特性を隠して、マジョリティ規範の社会に過剰に適応しようとする社会的カモフラージュが促進される」ということが立証された。R4年度は横断的なデータにより関係性を確認し、R5年度には課題であった理論基盤の精緻化(図1)、マイクロアグレッション体験が孤独感を介したリスク要因の同定(図2と図3)を包括的に検討することにより、発達障害者の社会的孤独の生成・維持・悪影響が明らかとなった。

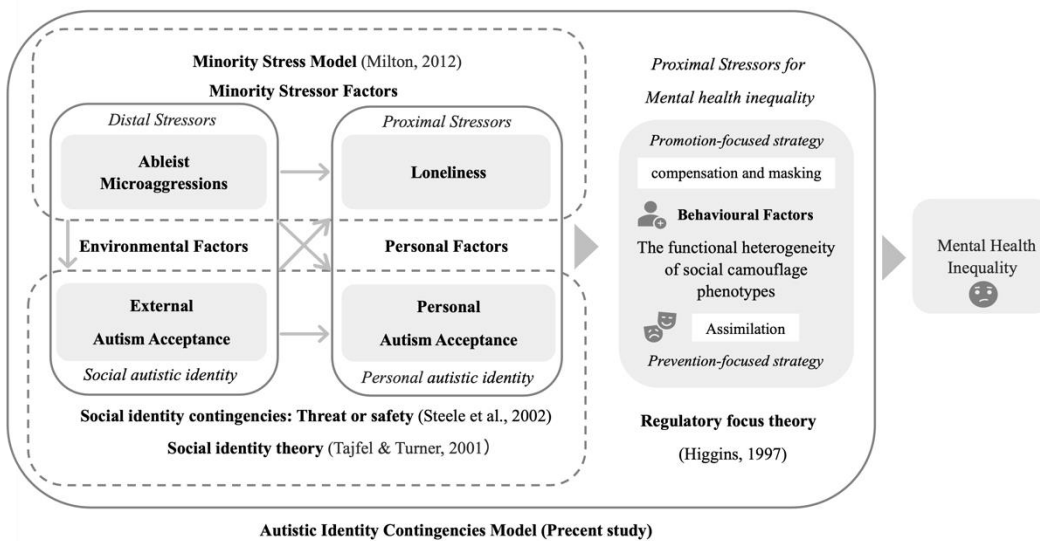


図1 マイノリティストレス理論と社会的アイデンティティ理論と
制御焦点理論を統合した理論モデル

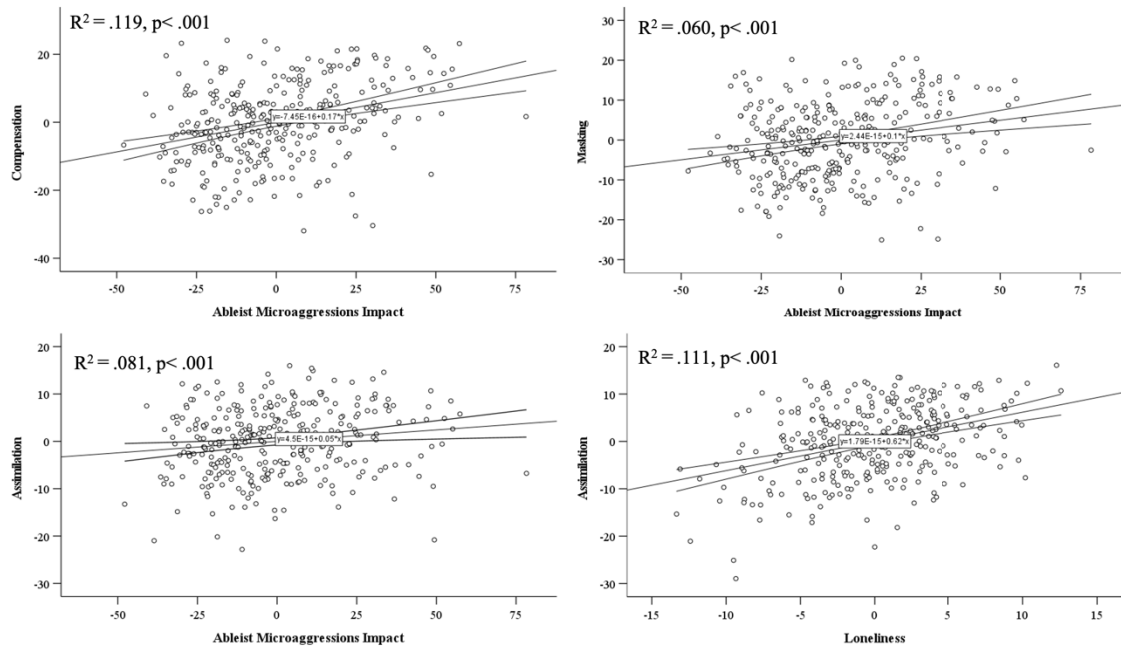


図2 マイクロアグレッションと諸要因の関係

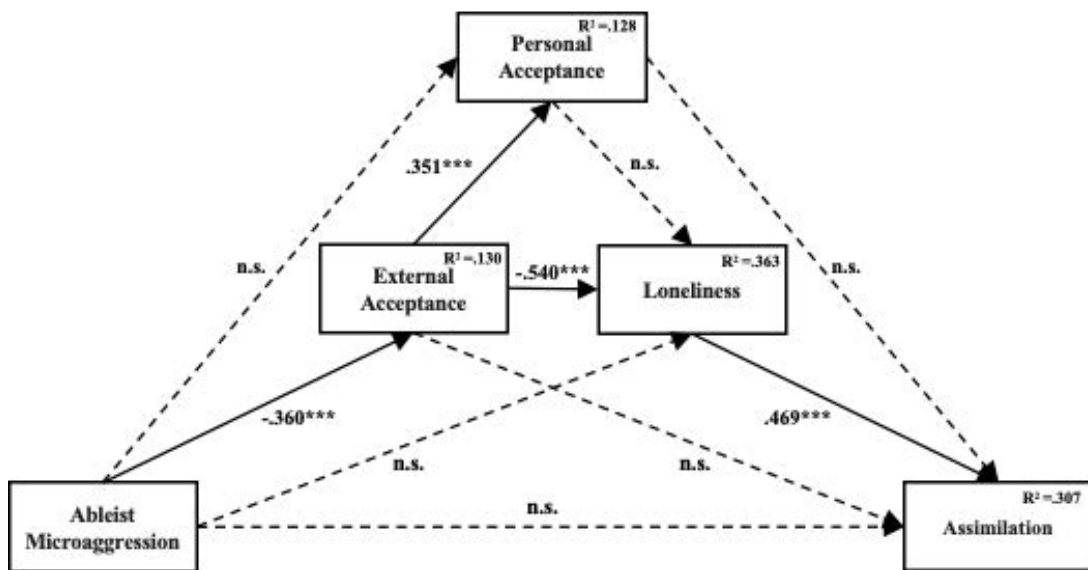


図3 マイクロアグレッション体験が孤独感を介したリスク要因の維持モデル

Q2. 発達障害（特に自閉スペクトラム症）当事者のマイクロアグレッションの体験の特徴は何か？

A. ①障害に対するマイクロアグレッション尺度日本語版の開発を行った：Q1.で用いた無意識の差別を量的に測定する尺度として、能力主義的なマイクロアグレッションを測定する尺度である Ableist Microaggressions Impact Questionnaire (AMIQ ; Aydemir-Döke ら, 2022) 日本語版を作成するために、尺度翻訳・バックトランスレーション・原著者とのディスカッションを経て、日本語を定めた。そして、尺度の因子構造や信頼性・妥当性の検討の検討を行い、原版と同様の因子構造、十分な信頼性と妥当性が確認されている。

②自閉スペクトラム症に対するマイクロアグレッションの質的研究を行った。：我々は発達障害者に対し、「発達障害者の孤立/孤独」「発達障害者の心の健康の問題」と、「発達障害者のマイクロアグレッション（無意識の差別）」、「発達障害を受容された体験」、「社会的カモフラージュの程度」等に関する無記名のアンケート調査を行った。現在は質的研究法である再帰手段分析法を用いて解析を行っており、発達障害（特に自閉スペクトラム症）当事者のマイクロアグレッションの体験として、「発達障害による経験を否定する」「発達障害を持つ人に対して他と異なる扱いをする」「抜きん出た能力を求められる」といったテーマが報告された。

Q3. 本プロジェクトで開発する、発達障害者への支援者に向けたマイクロアグレッションを減少させることを狙ったアプリである「オールマイノリティアプリ」の効果はあるのか？

A. 本プロジェクトでは、機械学習グループと連携して、発達障害者の支援者向け心理教育ツールとして、マイクロアグレッションへの気づきと行動変容を促す「オールマイノリティアプリ」を開発する。現時点ではアプリの有効性は明らかではないが、開発後に効果検証を行う。アプリ開発前の pilot 研究として、「発達障害者への支援者に向けたマイクロアグレッションを減少させるプログラム」によるオンライン遠隔介入の効果検証を行った。現時点の有効データ 40 名を対象とした pilot 解析の結果、未介入の1ヶ月前の時点（1）と介入直前の時点（2）比べて、介入後の時点（3）の支援者側のマイクロアグレッションが有意に低下した（図4）。

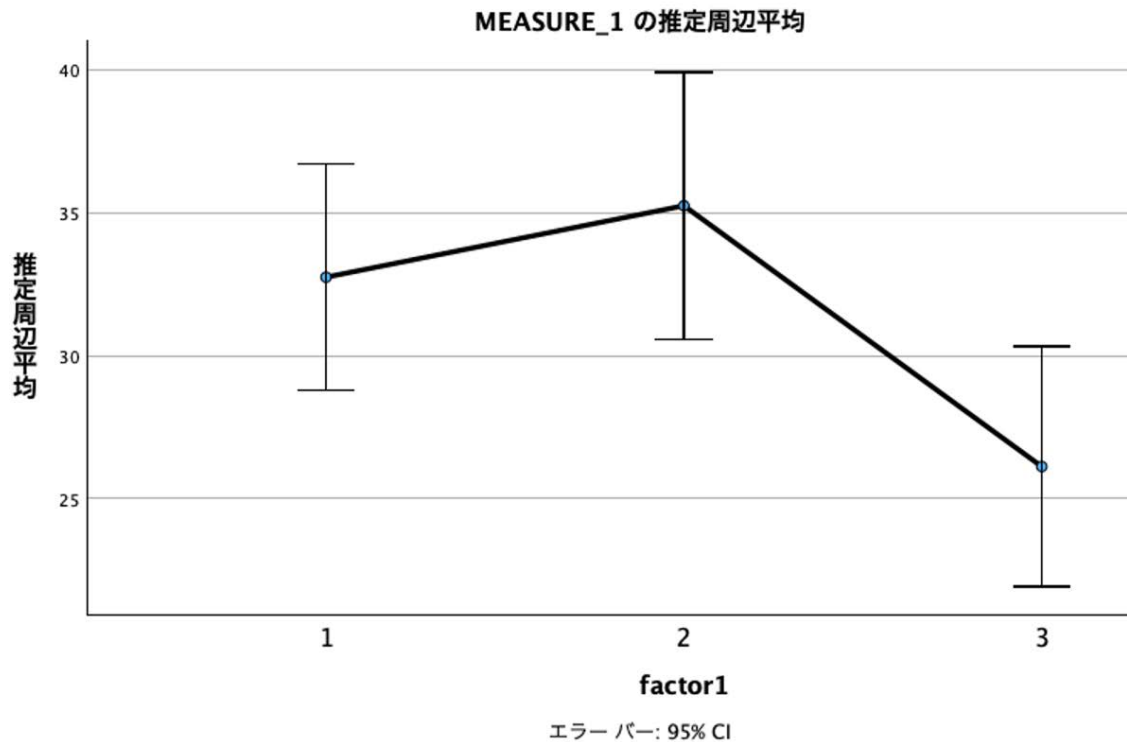


図4 「発達障害者への支援者に向けたマイクロアグレッションの低減プログラム」によるオンライン遠隔介入の効果検証

(5) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

プロジェクトの達成目標に対する現在の進捗状況については、オールマイノリティアプリの上市に向けてのアプリ化が、どのように運営していくかが定まらず、進捗が遅れている。これにはユーザーのニーズ調査などが不十分であることが挙げられる。

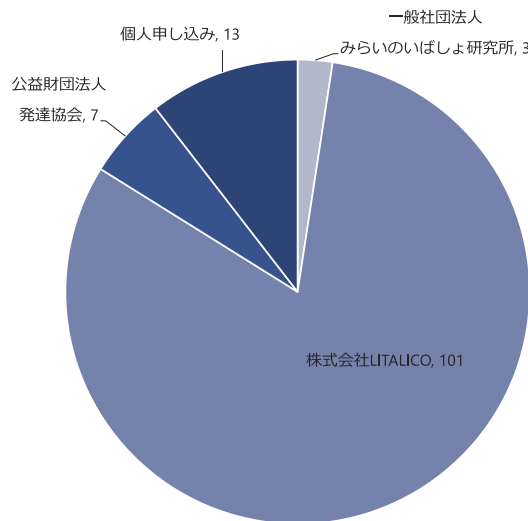
当該年度に明らかになった次年度に向けての課題とその解決方法の検討として、ユーザーのニーズを調査したうえで、どこまでを上市とするか、狙いを定めることにする。

2-5. 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2024年4月11日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、研究成果の論文化および成果公表に関する議論
2024年4月9日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、介入プログラムについての議論
2024年6月13日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、マイクロアグレッション判別アプリおよびプログラムに関する議論
2024年7月11日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、介入プログラムのリクルーティングおよび将来の展開についての議論
2024年8月8日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、介入プログラムのリクルーティングおよび将来の展開についての議論
2024年9月12日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、次年度のシンポジウムに関する議論
2024年10月10日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、介入プログラムの進捗共有、次年度のシンポジウムに関する議論
2024年11月14日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、介入プログラムの将来の展開についての議論、次年度のシンポジウムに関する議論
2024年12月12日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、次年度のシンポジウムの進捗報告、次年度計画と予算についての議論
2025年1月9日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、次年度のシンポジウムの進捗報告、次年度計画と予算についての議論
2025年2月13日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、次年度のシンポジウムの進捗報告
2025年3月13日	リーダー定例会議	オンライン	各グループの進捗共有、次年度のシンポジウムの進捗報告

3. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

当該年度では「オールマイノリティアプリ」の試作版となる「マイクロアグレッションに気づいて変えるプログラム」が完成した。プログラムの妥当性検証のため、研修会という形式で有人による実践を行なった。90分×3日間で参加するよう構成されている研修を計5回開催し、約120名の発達障害に関わる支援者が研修会への参加を希望した。



マイクロアグレッション低減プログラム参加者数 (124名)

参加者からは「働く中や日常生活の中でも目を向けて、自分が知らない間に相手を傷つけることをしていないかを振り返っていきます。」「マイクロアグレッションに気づける&減らせるよう研修内で学んだことを活かしていければと思っています。」「講義を受け、マイクロアグレッションについて知り、今自分がやっていることは…?と支援の中で立ち止まって振り返るようになりました。」など、非常に好意的な感想をいただいた。

(実施用資料)

マイクロアグレッションに気づいて変えるプログラム

オールマイノリティプロジェクト (All Minorities Project)

発達特性の「違い」の例2

「違い」なのに社会的に求められるのは…?

例えば、学校や職場の休み時間で…

みんなでおしゃべり vs **一人で音楽を聴く**

職場で自分だけ「窓口対応しなくていいよ」と相談なく、勝手に配慮をされていた。

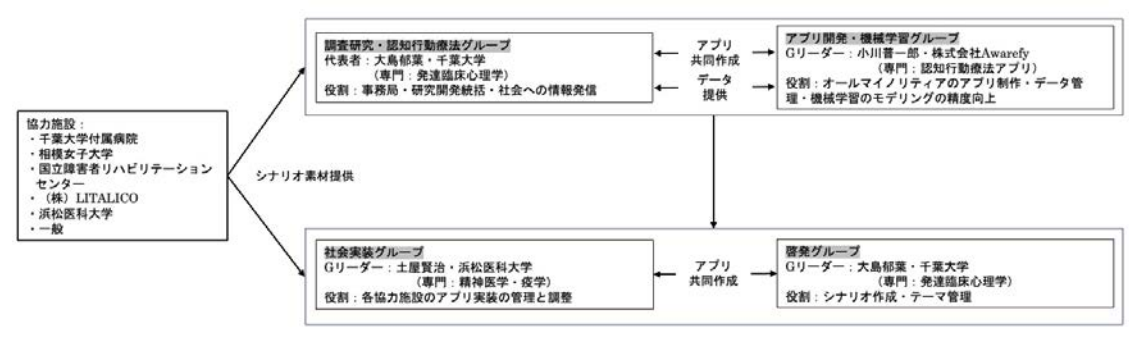
マイクロアグレッションの下位分類②

気遣いのない言動で相手の価値を貶める | マイクロインサルト

加害者 | 相手を傷付ける意図はないものの、無意識のバイアスから差別的な発言
 被害者 | モヤつとするが、わざわざ話の流れや雰囲気壊してまで抗議するほどでもなく、結局はそのまま流してしまうことがほとんど

職場で自分だけ「窓口対応しなくていいよ」と相談なく、勝手に配慮をされていた。
 ⇒自分に相談なく、発達障害だからと業務を調整された。

4. 研究開発実施体制



(1) 調査研究・認知行動療法グループ

リーダー	大島郁葉（千葉大学子どもこころの発達教育研究センター 教授）
実施項目	発達障害者の社会的孤立・孤独の生成維持メカニズムの仮説検証の実施および機械学習グループへのデータを提供する。マイクロアグレッション分類モデルと合わせたアプリのプロトタイプを作成する。
役割	本プロジェクトの中心的な仮説についてのエビデンスを検出する位置づけとなる。また、本プロジェクトにおける開発物である「オールマイノリティアプリ」内の認知行動療法のプロトコルを作成し、マイクロアグレッションのタイプとの紐づけを行う中枢的な役割を担う。

(2) アプリ開発・機械学習グループ

リーダー	小川晋一郎（株式会社 Awarefy 代表取締役）
実施項目	調査研究・認知行動療法グループが作成した認知行動療法のプロトコルをベースに「オールマイノリティアプリ」を開発する。また、機械学習によるマイクロアグレッションの分類モデルもオールマイノリティアプリに組み込み、精度向上のためのデータ取得システムをアプリ内に構築する。R6年度以降は機械学習グループとアプリ開発グループの取り組みの多くが重複するため、円滑にプロジェクトを遂行するために同一グループに位置づける。
役割	「オールマイノリティアプリ」の開発、およびマイクロアグレッションの分類モデルを「オールマイノリティアプリ」と連結させる。さらに、将来的にはアプリをより広い文脈にカスタムし、ことなる場面（医療、教育、産業等）や、発達障害以外のマイノリティにも使用可能なアプリの開発を目指す。

(3) 社会実装グループ

リーダー	土屋賢治（浜松医科大学子どもこころの発達研究センター）
実施項目	アプリの試作品を発達障害者支援施設等で予備的に使用してもらい、そのフィードバックを得ながら、アプリ開発・機械学習グループとの話し合いを経て改良へつなげる。
役割	発達障害の支援者や学校教員らの協力を仰ぎながら、オールマイノリティアプリを実装する役割を担う。

(4) 啓発グループ

リーダー	大島郁葉（千葉大学子どものこころの発達教育研究センター 教授）
実施項目	漫画・動画という表現媒体を用いて、不可視化された概念（マジョリティやマイノリティ、マイクロアグレッションなど）を分かりやすく表現するための心理教育マテリアルを作成する。
役割	発達障害の専門家と共同制作で、発達障害をはじめとする様々なマイノリティに対するマイクロアグレッションについて、漫画、映像、ドキュメンタリーとして広く表現することでオールマイノリティプロジェクトを啓発する。さらに発達障害に対しては、当事者の方からの実際の困り感なども紹介してもらう。グループとしてはその性質上、独立させるが、研究機関や企業への所属するものがないため、代表研究者の調査研究グループに位置づける。
他のプロジェクトとの連携	令和4年度に採択されたソリューション創出フェーズの「神経多様性に応じたチャットボットの地域連携モデルの構築および他対象・多地域展開」（筑波大学）において「当事者視点をもった支援を行う」ことが本プロジェクトと共通しているため、プロジェクト間連携の役割を担う。他のプロジェクトとの連携活動としては、障害（身体・発達・知的・その他）を持つ当事者へのインタビュー実施や冊子の作成、冊子の配布を行うことことを予定しているため、これらの活動の連携やマネジメントを行う。

5. 研究開発実施者

調査研究・認知行動療法グループ（リーダー氏名：大島 郁葉）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大島 郁葉	オオシマ フミヨ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	教授
高橋 史	タカハシ フミト	信州大学	教育学部	准教授
和田 真	ワダ マコト	国立障害者リハ ビリテーション センター	研究所 脳機能系障 害研究部	室長
井手 正和	イデ マサカズ	国立障害者リハ ビリテーション センター	研究所 脳機能系障 害研究部	研究員
市川 樹	イチカワ イツキ	国立障害者リハ ビリテーション センター	研究所 脳機能系障 害研究部	流動研究員
清水 栄司	シミズ エイジ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	教授
本郷 美奈子	ホンゴウ ミナコ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員
田村 真樹	タムラ マサキ	千葉大学大学院 医学研究院	認知行動生理学	特任研究員
高階 光梨	タカシナ ヒカリ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員
管 思清	カン シセイ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員
川口 恭央	カワグチ ヤスオ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員
川島 正充	カワシマ マサミツ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員

橋本 佳奈	ハシモト カナ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員
上田 翠	ウエダ ミドリ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	研究生
Nora Choque Olsson	ノーラー・チョク エ・オールソン	ストックホル ム大学		准教授

アプリ開発・機械学習グループ（リーダー氏名：小川 晋一郎）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
小川 晋一郎	オガワ シンイチ ロウ	株式会社 Awarefy		代表取締役
秦 正顕	ハタ マサアキ	株式会社 Awarefy	Awarefy 事業部	リーダー
池内 孝啓	イケウチ タカヒロ	株式会社 Awarefy		取締役
国里 愛彦	クニサト ヨシヒ コ	専修大学	人間科学部	教授
高橋 徹	タカハシ トオル	早稲田大学	人間科学学術院	助教
辻 拓将	ツジ タクマサ	帝京大学	医療技術学研究科	研究支援員
村中 誠司	ムラナカ セイジ	大阪大学	人間科学研究科	助教
竹林 由武	タケバヤシ ヨシ タケ	福島県立医科大 学	医学部	講師

社会実装グループ（リーダー氏名：土屋 賢治）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
土屋 賢治	ツチヤ ケンジ	浜松医科大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任教授
加藤 健生	カトウ タケオ	浜松医科大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	特任研究員

鈴木 晴香	スズキ ハルカ	浜松医科大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	技術補佐員
-------	---------	--------	----------------------------	-------

啓発グループ（リーダー氏名：大島 郁葉）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
大島 郁葉	オオシマ フミヨ	千葉大学	子どものこころの 発達教育研究セン ター	教授
榎本 大貴	エノモト ダイキ	(株)LITALICO	クオリティマネジ メント統括部	統括部長
野口 晃菜	ノグチ アキナ	一般社団法人 UNIVA		理事

6. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

6-1. シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要
2024/4/7	2024年度 オールマイノリティプロジェクト 公開シンポジウム 『どうして上手くいかないの?』当事者とともを考えるこれからの発達障害の支援のあり方	大島郁葉	ZOOM	848名	様々な視点から、支援者が支援を受ける方を理解する過程において、どのような支援者側の偏見が支援の壁となり得るのか、そこにはどのような解決方法があるかについて学び、議論を行う

オールマイノリティプロジェクト 2024年度 公開シンポジウム

「どうして上手くいかないの?」 当事者とともを考えるこれからの 発達障害の支援のあり方

趣旨 | 支援のスキルには、被支援者のニーズをまず「理解する」ということが必須条件となります。しかし、被支援者を「理解する」というプロセスは、支援スキルの中では、あまり重要視されていないかもしれませんが。この被支援者を「理解する」ことの壁としてあるのが「バイアス（偏見）」です。バイアスというのは、例えば「発達障害の人はこうなることを望んでいる」「子どもは学校へ行くべき」「女性が子どもがいた方が幸せだ」といった思い込みやステレオタイプを指す言葉です。本シンポジウムでは、どのような支援者側のバイアスが支援の壁となり得るのか、そこにはどのような解決方法があるかについて学び、議論を行う予定です。

開催日程 | 2024.4.7
13:00 - 16:10

- **13:00 - 13:10**
代表挨拶・開会挨拶
大島郁葉 (千葉大学)
- **13:10 - 13:50**
第一部 | 基調講演
熊谷晋一郎 (東京大学)
当事者ととも考える、
支援における不均等とこれからの支援のあり方
- **13:10 - 13:50**
第二部 | パネルディスカッション
パネル1 | 高橋璃子 (翻訳家)
バイアスに気づく、バイアスを変える
パネル2 | 野口晃葉 (UNIVA)
学校教育における支援者のバイアス
パネル3 | 大木彩乃 (当事者・企業)
相互理解を不均等にしているものはなにか?
パネル4 | 西尾大輔 (厚生労働省)
発達障害者支援施設と活用について
- **15:20 - 15:30** 休憩
- **15:30 - 16:00** ディスカッション
- **16:00 - 16:10** 質疑応答

基調講演の講師紹介 | 熊谷晋一郎
東京大学先端科学技術研究センター | 准教授
現在は障害や病気を持った本人が、仲間力を借りながら、
症状や日常生活上の苦労など、自らの困りごとについて研究する
ユニークな実践である「当事者研究」という取り組みをテーマに
研究や教育を行っている。

当事者研究の研究者 熊谷晋一郎
オールマイノリティプロジェクト代表 大島郁葉
会社 臨床心理学者 高橋 史
企業で働く当事者 大木彩乃
発達障害 対策専門家 西尾大輔
インクルーシブ 教育研究者 野口晃葉
翻訳家 高橋璃子

Invisible Support Biases

All Minorities Project

【無料参加・オンライン開催】
【対象者】
・発達障害の当事者・家族
・発達障害の支援者
・発達障害に関心のある方

【申込方法】
・QRコードで申込
当日参加の申込期限
2024.4.7 (日) 12:00まで
・見逃し配信の申込期限
2024.5.7 (日) 12:00まで

6-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 書籍、フリーペーパー、DVD

- ・該当なし

(2) ウェブメディアの開設・運営

- ・SNSアカウント：@AMP_JPN (https://twitter.com/AMP_JPN)

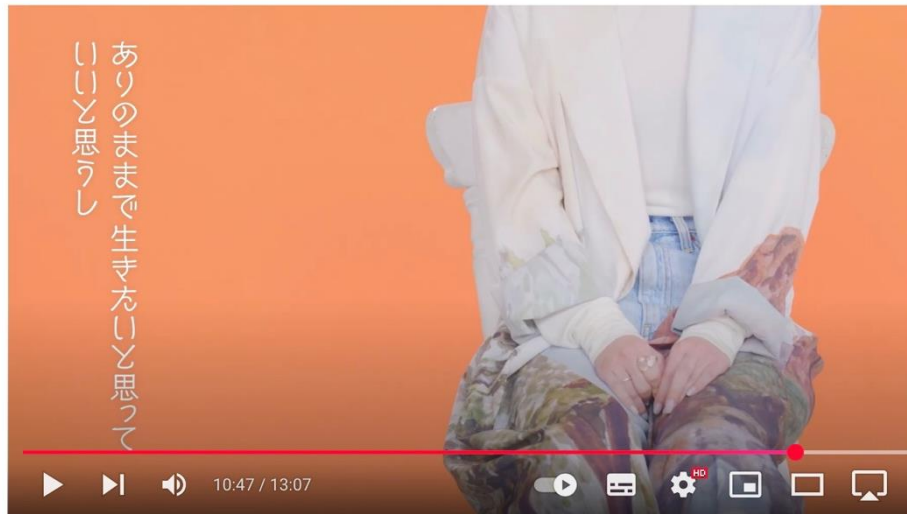
立ち上げ年月：2022年11月

反響：2024年に投稿した漫画は2025年3月時点で50,000回以上閲覧されている。



- ・ホームページ：All Minorities Project (<https://all-minorities.com/>)
立ち上げ年月：2023年2月
反響：約10,000名がサイトにアクセスしている(2025年3月時点)。

- ・YouTubeでの発達障害者のインタビュー動画の配信
(<https://www.youtube.com/@ampJPN>)
投稿日時：2023年6月29日 反響：約700回再生(2025年3月時点)



**Nothing about us without us (私たちのことを私たち抜きで決めないで) #1|
オールマイノリティ・プロジェクト**

(3) 学会(6-4.参照)以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- ・2024年度第2回東大家族看護学研究会、社会的カモフラージュとは何か - 実践と研究から理解する - (発達障害者における能力主義的マイクロアグレッションと社会的カモフラージュの話題提供)、東京大学、2024年6月22日
- ・こころの研修会うさぎのみみ、発達特性を持つ人への理解と配慮～無理解やマイクロアグレッションを防ぐために～、オンライン、2024年10月13日

6-3. 論文発表

(1) 査読付き (0件)

●国内誌 (0件)

・該当なし

●国際誌 (0件)

・該当なし

(2) 査読なし (0件)

・該当なし

6-4. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演(国内会議5件、国際会議0件)

- ・大島郁葉, 女性の自閉スペクトラム症と社会的カモフラージュ(発達障害者における能力主義的マイクロアグレッションと社会的カモフラージュの話題提供), 熊本保健科学大学 学生相談・修学サポートセンター 2025年3月3日

- ・大島郁葉，発達障害とマイクロアグレッション，一般社団法人みらいのいばしょ 研究所 2024年度心理学講座 2025年2月23日
- ・大島郁葉，和田真，熊谷晋一郎，綾屋紗月，酒井彌生，和田恵，発達障害研究における倫理（発達障害者における能力主義的マイクロアグレッションと社会的カモフラージュの話題提供），日本発達神経科学会第13回学会集，2024年11月10日
- ・大島郁葉（千葉大学）、堀内ゆかり（九州産業大学）、木下智美（佐世保市浅子小中学校）、金澤潤一郎（北海道医療大学）、尾崎康子（東京経営短期大学）、自閉スペクトラム症（ASD）支援の最前線、一般社団法人日本臨床発達心理士会第20回全国大会 実践セミナーA、2024年8月24日
- ・大島郁葉（千葉大学）、本田真美（みくりキッズくりにつく）、井上雅彦（鳥取大学）、和田真、原哲也（児童発達支援事業所 WAKUWAKU すたじお）、ASD（自閉スペクトラム症）の子の理解と支援の実際、公益社団法人 発達協会 公開研修会、TFT ビル東館、2024年8月7日

(2) 口頭発表（国内会議2件、国際会議0件）

- ・管思清（2025.3）「自閉的アイデンティティの随伴性を理解する：能力主義的マイクロアグレッション経験と社会的カモフラージュにおける自閉スペクトラムの外部受容感と孤独感の連鎖媒介効果」，「自閉スペクトラム症のアイデンティティを尊重する支援の取り組みへの挑戦」，日本発達心理学会第36回大会，東京（話題提供）
- ・加藤健生（2025.3）「自閉スペクトラム症者におけるマイクロアグレッション体験の実態から考える社会構造」，「自閉スペクトラム症のアイデンティティを尊重する支援の取り組みへの挑戦」，日本発達心理学会第36回大会，東京（話題提供）

(3) ポスター発表（国内会議0件、国際会議2件）

- ・Takeo Kato, Masamitsu Kawashima, Yasuo Kawaguchi, Siqing Guan, Hikari Takashina, Masaki Tamura, Kenji J. Tsuchiya, Fumiyo Oshima (2024.5) Experiences of Microaggressions toward Autistic People, The International Society for Autism Research (INSAR) Annual Meeting 2024, Melbourne, Australia
- ・S. Guan, F. Takahashi, H. N. Takashina, M. Tamura, T. Kato, Y. Kawaguchi, M. Kawashima and F. Oshima (2024.5) The Ableist Microaggression Experiences and Loneliness: The Role of Autism Acceptance, The International Society for Autism Research (INSAR) Annual Meeting 2024, Melbourne, Australia

6-5. 新聞/TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿（0件）

- ・該当なし

(2) 受賞（0件）

- ・該当なし

(3) その他 (0 件)

・該当なし

6-6. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

・該当なし

(2) 海外出願 (0 件)

・該当なし